

Title	ドイツ語學覚書(II)
Author(s)	古松, 貞一
Citation	ドイツ文學研究 (1963), 11: 79-92
Issue Date	1963-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/184887
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ドイツ語學覺書 II

古松貞一

私は尋ねる者、識らない者
として語っているのだ。

モンテーニュ

- ③ 東獨 Duden のひとつの利用法
- ④ Binde-s について
- ⑤ Er ist viel gereist.
- ⑥ dergleichen は複數か單數か
- ⑦ verliedern について

③ 東獨 Duden のひとつの利用法

Der Große Duden の Rechtschreibung が東西ドイツからそれぞれ出版されている。これは政治事情の痛ましい結果であるが、辭書は種類の多いほど便利であるにはちがいないので、Duden が二種あることも、使い方によっては時に大きな便宜を與えてくれることがある。東獨 Duden には西獨のには載っていない意味や語形を示してあることもある。それらは大いに活用する方がよいと思うので、具體例を少し取り出して見ることにする。もっとも辭書のなかにまで政治を持ち込んでいるような點があり、首肯し難いところもあって、例えば Rechtschreibung の辭書なのに Nation の項に長々と historisch entstandene stabile Gemeinschaft von Menschen, entstanden auf der Grundlage der Gemeinsamkeit der Sprache, des Territoriums, des Wirtschaftslebens und der sich in der Gemeinsamkeit der Kultur offenbarenden psychischen Wesensart◀ と他の單語との均衡を失した長さの語義を掲げていて、最後に [Stalin] とある。説明に括弧を附してある點からも、どうやらこれは Stalin の定義をそのまま轉載したもののように見受

けられる。しかもこのドイツ語のたどたどしさはどうしたわけであろう。まさか語學の、しかも正書法の辭書のなかで Stalin に Nation の定義を教わろうとは夢にも思っていなかったが、このような特殊事情を除くと、東獨の Duden には、さきに述べたように西獨の Duden どころか、いろいろ大きな辭書を調べても不明な語義がいくつか見付け出せるのである。

Franz Werfel の *Kleine Verhältnisse* を例にとれば——この小説の初出は Paul Zsolnay Verlag の Jahrbuch 1930 (但し發行は1929年)、單行本は1930年、全集は *Erzählungen aus zwei Welten*, Band 2 所収で1952年發行の三種類が知られているが、單行本と全集の間には異同があるにしてもわずかで、1929年發行の初出本は單行本全集本とくらべて大きな異同がある。ただし以下例にあげる三つの單語は三刊本全部に共通しているので、頁數の指示は全集本に依ることにする。——その第 255 頁にある ≧Remuneration≪ に東獨 Duden では、普通の語義のあとに、österr. auch として *zusätzliches Gehalt zu bestimmten Anlässen* と説明のあるのは親切である。第 259 頁の

Mein schönes Fräulein, Sie haben mich petschiert...

の ≧petschieren≪ にも、同じように österr. auch übertragen として in eine unangenehme Lage versetzen の意と解説がある。第 285 頁の ≧odios≪ に對しては odiös の項に oder, österr. nur として odios の形が示されているのは大いに助かる。さて以上三例：Remuneration, petschieren, odios にすべて österr. の註記がある點に留意されたい。ここにいう österr. は舊オーストリア・ハンガリー時代の勢力範圍まで及ぼして差支えないのである。従って本來のオーストリア作家のほかに Rilke, Werfel, Kafka 等々も Duden-Lexikon では皆オーストリアの作家となっている位だから、東獨 Duden が役に立つときがあるのである。さらに Musil, Broch, Weinheber, Dürrenmatt, Frisch とならべてくると、餘談だが、どうもわたくしは——わたくしたちかな——純ドイツの作家をまるで毛嫌いしているように見えてくる。

話を Duden に戻せば irgendein の綴りがオーストリア系では irgend ein になるのだが、この點までは東獨 Duden も觸れていない。これらの點は第13

版以前の Duden が大いに役立つことを附記しておこう。第13版以前の Duden には Preußen, Bayern 及び Österreich の正書法専用の辭書に見られる異同が克明に欄外に註記されている。拙藏のものはかなり古いのであるが、この三種の書名を挙げると：

Regeln für die deutsche Rechtschreibung nebst Wörterverzeichnis.
Herausgegeben im Auftrage des Preußischen Ministeriums für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung. Berlin 1931

Regeln für die deutsche Rechtschreibung nebst Wörterverzeichnis.
Herausgegeben vom Bayerischen Staatsministerium für Unterricht und Kultus. Neue Bearbeitung. München o. J. (但し小生購入1931年)

Regeln für die deutsche Rechtschreibung nebst Wörterverzeichnis.
Amtliche Ausgabe. Wien 1930.

第13版までというのは、東西分裂後も西獨 Duden が従来通りオーストリアその他の異同を洩らさず挙げていたのに、第14版(1955年)にいたって、欄外註記を残らず削除してしまったことにも、東獨 Duden に見受けられるのと同じ特殊な政治事情が反映しているのであろうか。もしそれならまことに悲しむべき事態であるといわねばならない。Paul の改訂版も東西からそれぞれ出版されているのを読みくらべても、東西分裂の悲劇がにじみ出ている。

東獨の Fremdwörterbuch はよく出来ている外來語辭典で、Pathetik が載っているのはこの辭書だけのように思う。さきの三例がたまたま外來語なのでどうかと當って見ると、Remuneration は残念ながら未収であったが、残りの二つ petschieren と odios とは収められてあった。

東獨 Duden の今一つの長所はやはりオーストリア系の綴りをていねいに示している點である。例えば ohne weiteres に österr. auch として ohne weiters をも載せているのは、オーストリア系の作家の作品を読んでいる際に、安心して読み進むことが出来る。この説明がないと weiteres か weitres の誤植ではないかと一應は疑って見なければならぬ。ドイツばかりでなく、オーストリアやスイスの作家のものを読む機会が多いから、ドイツ發行の辭書の

みでなく、オーストリア及びスイスで發行されている權威あるドイツ語の辭書で調査したら、案外苦勞がないかも知れない。どのような辭書が適當なのか、必ずあると思うのであるが、書物だけが頼りのわたくしでは一向に目鼻がつかない。ドイツへ留學したひとに尋ねて見ても、こんな方面には関心が薄いのか、教えて貰えない。近かそうで思いの外遠いオーストリアなりスイスの語學辭典の現況をご存知の方は是非ご教示願いたい。

Dürrenmatt のものなどを讀んでいると Diabetes が男性なのに女性に用いられている。スイスではそうなのか、または Dürrenmatt が Zuckerkrankheit に準じて女性にしたのかはっきりしない。Eau de Cologne のように Duden が中性又は女性としているから、フランス語 Eau の意識が強ければ女性になったり、Wasser に引き寄せられて中性になったりするのだと Diabetes の場合にもいい切つてよいのかどうかという問題がある。

Réserve と accent aigu まだつけておきながら女性にしないで、mit einem Réserve と男性か中性か分らないが、Vorrat に準じておそらくは男性として用いているが、普通ドイツで用いる女性名詞 die Reserve はスイスでは用いられないのか、または Dürrenmatt のみの好みによるものなのか。

また beim Durchschnittsmensch などという綴りを見ると、なるほど古くは Mensch を強變化にすることは稀にはあったにしても、もしや誤植ではないかと怪しくなる。niesen でよいと思うのに、わざわざ nießen が使われている。四卷本 Sanders に Hebel の例として niesen のほかに nießen が載っているからよいようなものの、スイスでは普通 nießen と綴るのかどうか分らない。

Garagist なども Garage から直接造られた單語なのか、フランス語の garagiste から廻り道をした外來語なのかも知りたくなる。この疑問が起るのは Portwein と普通綴るのをフランス形の Porto を用いているからで、やはりフランス語の影響の方を強く認めたい氣持になる。

その他 gewitzig という形容詞が用いられているが、普通のドイツ語の gewitzigt の誤植か、又は Grimm にある das Gewitz から Geschäft → geschäft-

tig のような経路で造られた形容詞かなど、全く *Dürrenmatt* を読んでいると疑問百出である。というのが *Dürrenmatt* はその上にドイツ語の常識である大文字、小文字の使用が全くでたらめで *Primitives* とあるかと思えばすぐ *ähnliches* があり、für's, aufs が雑居していたり、auf dem Laufenden sein と auf dem laufenden sein が共存する有様である、über jemanden Gericht sitzen とあって、Gericht halten との Kontamination があると思ふと、他のところでは正しく Gericht halten が使われているといった爲體である。Gericht halten と zu Gericht sitzen の Kontamination に類するものは他にもあって、sich am Käse guttun という熟語が用いられている。これは何としても

sich an etwas gütlich tun

sich etwas zugute tun

の Kontamination と考えられるのであるが、ひよっとして、スイスでは *Dürrenmatt* の用いている形が通用なのかと不安になる。いよいよ以ってスイスで一番定評のあるすぐれたドイツ語の辭書が見たいわけである。それを見れば *Dürrenmatt* の筆ぐせなのかどうか、分ろうというものである。

④ Binde-s について

Wassernot (Mangel an Wasser) と Wassersnot (Überschwemmung), Landmann と Landsmann のように Binde-s の有無で意味の異なるものや、Kaiserkrone と Königskrone のように、常識で考えれば Kaiserreich, Königreich から類推して、両方とも Binde-s は不用かと思えば、一方にだけあるといった Binde-s の複雑さはさて措いて、ちかごろ Binde-s の用法に浮動性があるやに見受けられるので、二三氣付いた點を取り上げる。まず次の二つの文を注意されたい。

a) In einem Winkel des Gewölbes saßen ein Geigenspieler und ein Zithermädchen mit seinen zigeunerhaften Zügen; sie hatten ihre Instrumente auf dem Schoße liegen und schienen teilnahmslos

vor sich hinzusehen.

b) Als Kind war er still und sanft gewesen, so sanft, daß er oft mit einem Mädchen verwechselt wurde. Ob diese Sanftmut auf Teilnahmslosigkeit gegenüber seiner Umgebung beruhte, ob er mit sich beschäftigt war und seinen Träumen nachhing, prüfte niemand nach.

a は Storm の文, b は F. G. Jünger の文である。a には *teilnahmslos*, b には *Teilnahmslosigkeit* と *Binde-s* の問題がある。いずれかが誤植ではないかと想像出来るが、實は誤植でないので、新しい作家の場合常に *Binde-s* のある方が用いられているのに気付く筈である。わたくしたちがドイツ語を學び始めたころは、教科書に現代作家のものがあまりなかったせい *teilnahmslos*, *Teilnahmslosigkeit* の方のみが記憶にある。*Sanders* を調べても勿論 *Binde-s* のない方が載っている。こういう場合には *Duden* のいろいろの版をしらべるより方法がなく、また一番近道なので、他に二三ある正書法の辭典も採用して當って見ると、次のような結果を得た。もっとも拙藏の *Duden* は第 9 版からしかなく、その上に途中第 12 版が抜けているのだが、本學の圖書をしらべて見ても、拙藏以外のものは見當らなかつた。初版からのが揃っている大學がどこかないものか、また第 12 版をご所持の方があれば、抜けているところをご教示下さることを心から願ひする。

9. Aufl. (1922)—11. Aufl. (1934)	<i>teilnahmslos</i>
K. Erbe (1927)	<i>teilnahmslos</i>
Theodor Matthias (1932)	<i>teilnahmslos</i>
13. Aufl. (1947) 西獨	<i>teilnahm[s]los</i>
14. Aufl. (1955) 以後 西獨	<i>teilnahmslos</i>
15. Aufl. (1957) 東獨	<i>teilnahmslos</i>

これを見ると、辭書に *-(s)-* の形で *Binde-s* が示されている場合は、辭書作成の時期がたまたま *Binde-s* の不安定が激しい時期に重なつたと解すべきであつて、常に *-(s)-* であるという意味でないことが分る。例えば *Rilke* はすでに *Das Stunden-Buch* の第二歌 *Das Buch von der Pilgerschaft* (1901) で *teilnahmslos* の形を用いている。従つて正書法に限つては良い辭書でも古

いと權威にならぬという厄介な點に留意しなければならぬ。

げんに Grimm や Trübner にも Teilnahmslosigkeit の形で出ていて、J. Grimm の文が例に引かれている。しかも Trübner できえ現在通用の形には觸れていないのである。

このことは單に Binde-s のみの問題でなく、性についてもいえるので、Taxi は既に中性に、Dschungel も最近では殆んど男性に定着しようとしていて、Duden の第11版が既に役に立たぬところに來ている。

さて Geschichtschreiber は Geschicht(s)schreiber を經て、現在は Geschichtsschreiber と西獨ではなっているが、東獨では依然 Geschicht(s)schreiber どまり。Miethaus も現在は Mietshaus が通用になっている。だとすればちかごろの言語意識が Binde-s 多用に傾いて、辭書がそれを採用したと考えられそうだが、簡単にそうとばかりはいえないところに、言語現象の複雑微妙な點がある。何となれば zusammenhanglos の場合は正に逆であって

- | | |
|------------------|--|
| 11. u. 13. Aufl. | zusammenhanglos |
| 14. Aufl. 西獨 | zusammenhang(s)los
Zusammenhangslosigkeit |
| 15. Aufl. 西獨 | zusammenhang(s)los
Zusammenhang(s)losigkeit |
| 15. Aufl. 東獨 | 15. Aufl. 西獨と同じ |

西獨の第14版は-[s]-と-s-とが並記してある。誤植かとも思われるので、ここを調べるだけの目的で改新第14版(1958年)を取寄せて見たが、變更なしであった。そして既に Musil は zusammenhanglos を用いて、

Die Männer redeten zusammenhangloses Zeug.

と書いている。Mackensen の Deutsche Rechtschreibung (1955) には zusammenhanglos が載っているから、何故これを挙げないのかと、奇異に感じられる向きがあるかも知れないが、前記の teilnahmslos の方も Mackensen は Binde-s のない teilnahmlos であるし、ここには詳述しない種々の理由があって、Mackensen を證機にとって物をいうことは差控えたい。

綴字についても同じような浮動現象がある。

- | | |
|-----------------|--|
| 9. Aufl. | Primärschule |
| 10.—11. Aufl. | 缺 |
| 13. Aufl. 以後 西獨 | Primarschule [schweiz. für : allgemeine Volksschule] |
| 15. Aufl. 東獨 | 同上 |

そしてスイスの作家は實際に Primarschule の方を用いているが、Wildhagen には未だに Primärschule の形が残存している。

ところがここにひとり Binde-s に敢然と戦いを挑んだ勇敢な文學者があった。それは Jean Paul で、彼は自作を改版するたびに、思い切った荒仕事をやってのけて、Binde-s をどしどし削ったのである。その模様を彼自身に語らせよう。

Siebenkäs 第 2 版の序 (1817年) に曰く：

Bereichert hat sich weiter die neue Ausgabe durch die kritische Ausleerung von allen Genitiv-End-S in den Samm- oder Gesamtwörtern.

更に Hesperus 第 3 版の序 (1819年) には：

Das zweite, aber leichtere, was für diese dritte verbesserte Auflage des Hesperus geschehen, war natürlich, daß ich durch den ganzen Abendstern langsam hinging mit dem Jätmesser in der Hand und alles Genitiv- oder Es-Schmarotzer-Unkraut der Doppelwörter, wo ichs nur fand —dies war leider schon auf dem Titelblatte der Hundposttage der Fall—, aufmerksam herausstach.

つづいて Die unsichtbare Loge 第 2 版の序 (1821年) にも、次のように述べている。

Stehende Verbesserungen aller meiner Auflagen blieben auch hier die Land- oder Buch-Verweisungen von faulen Tag- oder Sprachdieben oder Wortfremdlingen und die Ausrottung falscher Genitiv-S und Ungs.

その結果がどうなるかといえば Freiheitfahne, Weisheit Zahn, Gelegenheitgedicht, Vermählungsfest, Scheidungsbulle から、男性、中性名詞にまで及んで Adelbrief, Glücktopf, Alltagsleben 等々。ところがさすがの Jean Paul も言語現象に徹底的に楯突くことは出来なかった。即ちこれほどの意気込みの彼も Reichsgraf, Todesengel, Himmelsveränderung 等々には Binde-s を残しているのである。それを Jean Paul は何と辯解するか。Hesperus 第3版の序文のなかで、前文につづいて：

Ich stand aber viel dabei aus; der alten Prozesse der überreichen Sprache mit sich selber haften zu viele auf ihren Gütern, und ich mußte daher manches eingenistete Es-Gesindel da lassen, wo es sich zu lange angesiedelt hatte und sich auf Zeugen und Ohren berief.

という不徹底な態度になるのである。それというのも Binde-s を2格と思ひ込んで女性名詞の語尾から Binde-s を削ることから、男性、中性にまで及ぼそうとしたところに彼の誤算があった。これ位で退却するのであれば、何もはじめから大見栄えを切るほどのこともないし、げんにドイツ語の「ことだま」は Jean Paul ひとり位の悪足掻きでは、びくともしなかった。ついでながら Hesperus の序文でいっている das zweite, leichtere に對する第一の困難な事業というのは、外來語驅逐であって、Jean Paul の作品集は版が改まる度毎に、外來語がどのようなドイツ語に改まって行くか——Jean Paul 自身はドイツ語への翻譯といっている——に興味があるので、所謂決定稿のみを編集した全集では、この経緯が調べられないので、そのような全集では無意味だとはいわないが、學問的好奇心から見れば、有難くない。1959年以後 Carl Hanser から引續き刊行中の Werke も、この意味ではわたくしには不満足なものといわざるを得ない。

⑥ **Er ist viel gereist.**

自動詞のなかに完了時稱をつくる時に、sein 又は haben を時の助動詞として用いるものがあることは、どの文法書にも説かれてあり、Tätigkeit an

sich の意味のときは haben を用いると教えてある。ところで上の見出し文はどうであろうか。Tätigkeit an sich の觀點からすれば、ist よりも hat の方が適當なように思われるし、文法書にもこのようなときには haben の方を用いるとしているものが多い。ところが reisen についてはかなり早くから、このような場合にも sein を用いることが多くなり、げんに見出し文のようなのが Stil-Duden にあり、Der Sprach-Brockhaus にも

Goethe ist (selten: hat) viel gereist.

という文例があげてある。Paul には早くから、>Reisen< kann aber auch sein=>sich auf der Reise befinden<, selbst ohne Angabe eines Ausgangspunktes oder Zieles. In diesem Falle erscheint das Perf. häufig mit >haben< umschrieben: >ich habe oft gereiset< Lu., >ein Mann, der erst in Handels-, dann in politischen Geschäften viel gereist hatte< Goe., doch gilt jetzt auch in diesem Falle >gereist sein< als das Korrekte.

と説明してある。そしてわたくしは最近立て続けに次のような文を読んだ。

a) Zum blinden Werkzeug wollt' er Euch, zum Mittel

Verworfenner Zwecke Euch verächtlich brauchen.

Er hat's erreicht. Zu gut nur glückt' es ihm,

Euch wegzulocken von dem guten Pfade,

Auf dem Ihr vierzig Jahre seid gewandelt.

(Schiller, Wallensteins Tod, II, 6)

b) Ich bin achtzehn Stunden gefahren und bin hier.

(Curt Goetz, Dr. med. Hiob Prätorius)

c) Wir waren auf diese Weise ungefähr zwei Stunden marschiert.

d) So waren wir etwa zwei Stunden gewandert.

c), d) は Poe 原作の The Gold-bug の二種の翻譯で、念のため原文をあげれば

In this manner we journeyed for about two hours.

である。以上四例をあわせ考えて見るに、行爲そのものを強調するのではなく、
 》十八時間飛行機に乗って歸って來た《、》(そこまで行くのに)歩いて約二時
 間かかった《 という風に裏に 》場所の移動《 が含まれているときには、sein
 を用いてもよいということになりそうである。従ってはっきり場所の移動を示
 す言葉 (Er ist in die Ostschweiz gereist) がなくとも、このような動詞はも
 とも場所の移動の意味が強いからと考えると、文法書に als wir drei Wochen
 marschiert hatten と wir sind in drei Tagen hierher marschiert と二
 通りならべて、用法の差を説明してあっても、これは文法書が事態を明確にし
 たいための説明であると考えてはいかがであらうか。

⑥ **dergleichen** は複数か単数か

まず木村・相良の文例を全部あげる。

dergleichen Menschen

Zucker, Kaffee und ~ {Dinge}

nichts ~ tun

~ tun, als ob

Er erzählte uns Ereignisse, ~ gar nicht geschehen sein können.

岩波を見ると、ちがうところは

Zucker, Kaffee und ~ {mehr}

だけ。

相良・ポケット獨和では、

Dergleichen habe ich nie gehört.

が新しく加わる。

附加語として用いる場合は複数の例ばかり、獨立して單獨に用いる場合の例
 は残念ながら4格であるために、單数か複数かの見分けがつかない。即ち見出
 しの疑問が起るわけである。

複数の例は十分あるから、單数であることがはっきりしている例、つまり1
 格に用いた文例があるかということになる。はっきりさせるために氣付いた文

例を擧げようと思う。

a) Man hat mit Recht der Phantasie Iherings einen großen Anteil an dieser rekonstruierenden Arbeit beigemessen, ohne sie ist dergleichen ja ausgeschlossen.

(Vorrede zur sechsten Auflage von Iherings Geist des römischen Geistes)

b) Dergleichen drückt sich auch in der römischen Kunst aus.
(Bergengruen, Römisches Erinnerungsbuch)

c) Dergleichen Borniertheit ist bei diesem Titel (W. Benjamin: Deutsche Menschen) ebensowenig im Spiel wie Ironie.
(Neue Deutsche Hefte 88)

d) Ist denn dergleichen sehenswert?
(Ibsen, Die Stützen der Gesellschaft)

e) Mein Himmel, Melanie, das waren alte Zeiten, heutzutage kommt dergleichen nicht mehr vor.
(Le Fort, Die Unschuldigen)

f) In der Schlafrocksprache einer engen Berufszunft mag dergleichen hingehen, in die saubre Schriftsprache gehört es nicht.
(Eduard Engel, Gutes Deutsch)

g) >Was ich bin und was ich habe... <, nicht: > Was ich bin und habe<, obwohl dergleichen in der mündlichen Rede durchgeht; das Auge urteilt anders als das Ohr.
(Eduard Engel, Gutes Deutsch)

h) Dergleichen sprach sich natürlich herum.
(Mostar, Weltgeschichte—höchst privat)

これを見れば dergleichen は附加語としても、獨立して單獨に用いられるときも、單數の形もあることは認めてよいことになる。ここで逆にドイツの辭書はどうなっているかを調べると、Stil-Duden には出ていない。Sanders に

は一つ新しく ein dergleichen [derartiges] Gespräch という例が見つかるだけ。更に Wildhagen, Langenscheidt を調査しても収穫はない。結局やはり文例漁りが最も確實であることが分かったので、手近の辭書にとどめて、Grimm, Heyne, 大 Sanders, Trübner までは調べることを差控えた。

⑦ **verliedern** について

verliedern は Sanders, Wildhagen にあり、獨和でも木村・相良、三省堂獨和新辭典には載っている。しかし見出しの verliedern はどの辭書にも見當らない。それで語数の多いのが特色で、このような場合にいつも調べることにしている Wilhelm Hoffmann の Völlständiges Wörterbuch der deutschen Sprache という 1871 年出版の六巻本の辭書をしらべると、有難いことにちゃんと出ている。實は W. Scholz の Die Beichte という小説を読んでいて、この字にぶつかったのであって、その文は次の通りである。

Zwei ärztlich inzwischen mit vollen Beweiskraft festgestellte Giftmorde, von denen nur die Marquise Vorteil hatte und ihr unzweifelhafter Geliebter, der gleichzeitig den moralischen Tiefstand der Marquise kennzeichnete, ein verliederter Komödiant, der als ehemaliger Apotheker natürlich genaueste Giftkenntnisse besaß.

さて、これで済んだようなものの、念のためと思って Grimm に當って見て、妙なことを發見した。Grimm には verliedern のほかに verliedern という形を擧げて、説明の最後のところに vermutlich eine Diminutivform zu dem im Schriftdeutsch noch nicht nachgewiesenen »verliedern« とある。實は Scholz のこの小説は Grimm の編集に取り上げられていることが傍證によってはっきりしている。即ち Wunschblick の項にこの小説が例に採られているのであって、verliedern に文章語の例證なしという大膽な斷定は行き過ぎであることを示している。その上 Hoffmann には Geiler von Kaisersberg の文が例文として擧げられている。一體 im Schriftdeutsch noch nicht nachgewiesen などという大袈裟な表現が辭書の世界で許され

るものか。多人数の共同事業である辭書では、よくよく注意しないと、執筆者によって不統一や出来、不出来が目立つことになる。ちなみに Grimm には案外現代作家の文例がたくさん取り上げられているから、現代作家を読む場合にも億劫がらずに引いて見ることである。

Grimm の完成は慶賀すべきであるが、編集に年月を掛けすぎたために、また途中で編集方針の大変更があったために F までの部分とそれ以後とが釣合わないし、百科事典にゆずってしかるべき事項がずいぶんあり、語學的に初出年をはっきり示していない點など、残念ながらイギリスの O.E.D. にくらべれば格段の見劣りがする。現在の學界の基準から再編すれば半分位に縮小されて、却って使い易くなるのではあるまいか。